

アフリカの人々と名付け 29

アフリカと植民地化以前の「洗礼名」

小馬 徹

紛い物のキリスト教？

アフリカのキリスト教は表面的だと言う人がいる——残念だがアフリカの専門家にすら。だが、それらは一知半解の俗説と言うべきだ。

第一に、洗礼名と改宗とは同じ事を意味しない。前回、私が高校の英会話の授業では英語名を、スワヒリ語研修ではイスラム名を名乗らされた逸話を紹介した。教師と学生の間には権力の格差があり、そうした名前を甘受する事が講義を享受する実際上の前提条件だったのだ。

同様に、植民地状況では洗礼名を名乗らなければ著しい不利を招いたのだから、それは生き抜く上で方便であり、不実を意味しない。アフリカでは、洗礼名を名乗る事とキリスト教徒である事との間に構造的なズレが存在する。

アフリカ諸国の独立も、世界システムとしての資本主義が地上の隅々まで浸透し、包摂して行く歴史の流れを押し止め得ず、アフリカ人の名前を巡る状況も大きく変化しなかった。今も信仰を動機としないでキリスト教会に近づく人々もあろう。その原因もまた同じ所にある。

だから、アフリカ人の欧米的な名前や、上辺だけのキリスト教徒の存在をあげつらって揶揄するのは、非論理的である。非キリスト教徒をキリスト教徒と見なしたうえで、彼らが非キリスト教的だと言うのと同じだからだ。それは、いわば「意図的な誤解」とさえ言ってよい。

アフリカと「世界宗教」

さて、アフリカは、「土着宗教」だけの大陸ではない。古くからアラブの影響を受けていた事は、良く知られている。紀元前の『エリュトラ海案内記』は、アラブ世界からアフリカ東海岸への通商航路の古さを確証する。通商と絡んで、やがてごく早い時期から東海岸へイスラ

ム教が伝えられ、遅くとも11世紀にはアラブ人が定住してスワヒリ世界を形成し始めた。

アフリカの北部や西部ばかりでなく、スーダン・ベルトと通称されるサハラ砂漠南縁の地域にも、古くから栄えた王国や都市があった。1324-25年、マリ王国のマンサ・ムーサがメッカへ豪華な巡礼をした話は、古来有名である。この地域では、砂漠の船たるラクダによる通商を通じて、早くからイスラム教が普及した。

キリスト教のアフリカへの浸透は無論遥かに早く、北アフリカへは成立後間もなく伝わった。修道院は4世紀初頭にエジプトで始まり、ヨーロッパに波及した。同地とエチオピアでは、コプト教が今も命脈を保っている。そして大航海時代に入ると、ポルトガルがアフリカ西部や南部の沿岸地域で布教活動を繰り広げた。

欧州的苗字をもつ人々

ところで、一部の人々が、植民地化以前から西洋的な名前を持っていた所がある。それは、ポルトガル以来ヨーロッパと交易関係があった、ナイジェリア南部やガンビアなどである。

イジョ人は、ナイジェリア南部のニジュール川三角州地帯に住むクワ語系の農耕民で、カラバリ、ネンベ、ボニ、オキリカの4支族に分かれる。16世紀初頭にヨーロッパ人貿易商と交易開始後間もなく奴隷を、次いで油椰子を取引きする濃密な交易網を形成し、17世紀には幾つもの都市国家を打ち立てた。有力な交易商人は議會を構成して、世襲の王と共に都市国家を支配した。また、大量の奴隷を買い入れて同化し、自分の属する共同体を強化したのである。

イジョ人には、今日 Bellgam, Bestman, Brown, Cookey, Cookeygam, Clark, Douglas, Fine-country, Lawson, Strongfaceなどの苗字

があり、通常19世紀後半のヨーロッパ人交易商や探検家との接触がその起源だとされている。

同国のイグボ人である研究者、マドゥブイケは、それらの多くはヨーロッパ人が入った土地の地形・気候 (Finelcountry) や彼らのために働いた人物の容貌・性質 (Strongface, Bestman) に因んで付けられたものだとする。一方、DouglasやClarkなどは、今では普通だが、明らかに異国的な名前だと言う [Madubuike, I., *A Handbook of African Names*, 1994]。

確かに、Clarkはclergyman (教会牧師) を意味する苗字だが、書記や秘書の意味も持つ。一方Douglasは、ゲール語で暗い水 (川) を意味し、スコットランドの地名に由来する。だから、思い切って推測すれば、これらの苗字もまた、実はマドゥブイケが上に挙げたのと全く同じ起源をもっているのではないだろうか。

意味のない名前

ここで注目を要するのは、「王や首長、それにヨーロッパ人交易商が通商するオイル・リバーズの他の重要な人物たちが英語の名前をアフリカ名としてもつ事が、早い時代から慣例となっていた」事である [Jones, G. I., *The Trading States of the Oil Rivers*, 1970]。

一方マドゥブイケは、イジョ人の名前には (Kweni→) Queen, (Iyola→) Yellow, (Uba-ny→) Grand Bonny, (Juky→) Cookey, (Perukule→) Peppleのように、単に英語風の音を当てただけの名前もあると言っている [Madubuike, *ibid.*]。

つまり南部ナイジェリアでは、古くは英語の名前をもつ事が交易商として都市国家の重要な地位にある事を象徴したが、時代が下がると庶民も英語風の苗字をもつようになったのだ——明治維新後、瀬戸内海の或る小島の人たちが、魚の諸々の種名に適当な漢字を当てて貰って苗字にした、という逸話を連想させる。重要なのは、イジョでは、英語の苗字は伝統的な名前とは異なり、意味が知られないまま、あるいは固

有の意味を持たない形で導入された事である。

意味、機能、記号

ここで思い出すのは、社会人類学者レヴィ＝ストロースがアマゾンのナンビクワラ人の間に文字が現れる瞬間に立ち会った逸話である。貰った画用紙に銘々が半日ほど波線を描いた後、人々は飽きてしまった。だが、首長だけは違った。レヴィ＝ストロースが仲間入りの土産を人々に配る際に、逐一首長が何かを書いた紙片を取り出して、レヴィ＝ストロースの目の前に突き出す。彼は、延々とその「文字」を読み解く演技をするはめに陥ったのだった [Lévi-Strauss, C., *Triste Tropiques*, 1961 (1955)]。

まだ「石器時代」にいる人物が、文字という理解の偉大な手段を理解しないまま、彼の社会的な威信の増大という全く別の目的に役立つ事を鋭く見抜いたのだ。文字は、彼だけが白人の秘密に通じている事を象徴するものだった。

同じ事は、石上神宮の七支刀や隅田八幡神社の人物画像鏡の銘文などに代表される日本初期の漢字にも言える。鏡に写ったように左右反転した文字が散見されるのだ。柳生章も述べたように [『翻訳語成立事情』, 1982]、意味の理解よりも形の独占が社会的に重要だったのだ。

イジョ人の英語名は、まるでナンビクワラでの首長の文字めいた線や古代日本の鏡文字と同様、その個々の意味を理解される事なく、その形だけが記号として導入されたのである。

今でも、アフリカ系アメリカ人の一部には、(Kwako→) Quako, (Kumba→) Cumba, (Okiraka→) Ocrekaのような名前をもつ人々がいる。一方、リベリアを建国した解放奴隷たちは、かつての主人の名前を自らの名前として選択した [Madubuike, *ibid.*]。前者は名前の記号性ならぬ由緒や意味を尊重するがゆえであり、後者は記号に託して合衆国出自をことさらに誇りたいがゆえであった。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)